「大原御幸」を歩く

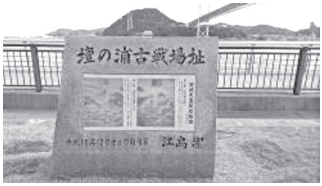
廣田　幸稔

京都市左京区大原は、市街地からバスで一時間ほど、京都の中心地から北東部に位置する山間の静かな里です。週末に限らず、三千院、寂光院（京都・大原）を訪れる観光客は年々増え、お土産物店や駐車場の呼び込みも賑やかです。

能「大原御幸」は『平家物語』の最後の「灌頂巻」、「大原御幸」を出典にしています。「灌頂」とは「菩薩が仏になる時、その頭に諸仏が水を注ぎ、仏の位に達したことを証明すること」だそうです。能「大原御幸」のシテ、建礼門院徳子は平清盛の娘として生まれ、十六才で六才年下の母方の従妹にあたる第八〇代高倉天皇に入内し、二三才で後の安徳天皇を授かりますが夫の高倉帝は二一才で崩御します。親子の幸せな暮らしは短いものでした。平家の栄華に陰りが見え始め、源氏の台頭により木曽義仲が都に攻め入ってから、坂道を転がり落ちるように平家は都を追われ、徳子母子は一門とともに西海に逃れます。今なら三才か四才くらいの幼い安徳帝が、生まれ育った都を離れ、八年の短い生涯を終えるまで、どこにいくとも知れない日々を過ごしたかと思うと切ないものがあります。

まずは物語を追うつもりで山口県壇ノ浦に行きました。『平家物語』で平家一門が源氏に敗れた「早鞆の浦」は現在の山口県下関と福岡県門司とを結ぶ関門海峡を指します。JR門司港駅（福岡県北九州市）から対岸の唐津港（山口県下関市）に渡る連絡船を利用しました。

↑平家一門之墓
有盛、清経、資盛、教経。経盛、知盛、教盛の七将に加え、従二位尼・平時子の名が見える



↑関門海峡山口県側にある壇ノ浦古戦場址の碑

↑レトロな雰囲気の
JR門司港駅

↑寂光院(京都・大原)
尼僧寺院らしい神聖にして優しげな雰囲気が、山門のたたずまいからもうかがわれます

↑赤間神宮本殿と安徳天皇阿弥陀寺陵

関門海峡は最も狭い部分が７００ｍで、今も多くの船が行き交う海の要所です。エンジンがついた現在の船で所要時間十五分ほどですが、海上に出ると想像以上に波が荒く、しっかりした造りの船に乗っていても潮の流れが速くて少し怖いくらいです。下関側には関門海峡を眼下、安徳帝をお祀りする赤間神宮があります。境内には壇ノ浦の合戦で命をおとした知盛、教盛ら七武将に加え、徳子の母・二位の尼の墓石もありました。

西海に落ちていくなか地獄のような光景を目の当たりにした徳子は、壇ノ浦の合戦で息子・安徳帝の後を追って海中に身を投げたものの、源氏方によってからめ手で引き揚げられ、京都に護送され、冒頭の大原の里で一族の菩提を弔う日々を送ることになります。

さて、京都に連れ戻された徳子は長楽寺（京都市東山区八坂）で剃髪し、真如覚比丘尼と名を改め、大原の寂光院で終生を一族の菩提を弔いこの地ですごします。

近年特に観光客で賑わう京都ですが、寂光院周辺はかろうじて今でも静かな環境にあります。建礼門院として仏門に帰依する彼女が大原に住んで一年余りの時、義父である後白河法皇が訪ねてきたのが「大原御幸」の舞台です。大原といえばしば漬けが有名ですが、実は建礼門院が里人の作る夏野菜と赤しその漬物の美味しさに感動して「紫葉漬」と名付けられたそうです。また、薪を頭に載せて運ぶ姿のルーツは建礼門院に仕えた阿波内侍との説も。愛する我が子や親兄弟を目の前で失い、今の私たちからは想像もでない過酷な人生を歩んだ彼女のことを思うと、晩年の里人との穏やかな暮らしを思わせるこの逸話は、せめてもの救いとなる気がいたします。

令和元年五月吉日

↑徳子が使用した井戸遺構

↑徳子が過ごした庵址

↑京都洛北にある大原の里

↑庵と対峙する山中に阿波の内侍らの墓がある

↑高倉天皇皇后徳子 大原西陵
大原の里を臨む